

・講演一「古代山城のフォーメイションと鞠智城」

出宮 徳尚（就実大学人文科学部非常勤講師）

はじめに

ただいまご紹介に預かりました出宮と申します。私は就職から定年まで岡山市教育委員会で文化財行政を担当しておりましたので、遺跡の見方や考え方について回ります。鞠智城もそういう行政的立場、行政的に見るとやはりどうなのかということをお話したいと思います。

一、日本古代山城の祖型たる高句麗山城

私は、古代山城の祖形になるものはやはり高句麗の山城と思っていますので、はじめに高句麗の山城をご紹介させて頂きます。

高句麗の山城は何かと言うと、基本的には逃げ込みの城です。形態にはいくつかの類型分類されていますが、要は先進的な中華帝国の支配に対して、地元の地域勢力がどう抵抗するかというのがコンセプトとして底流にあるという観点を持っています。ですから類型は別にして、基本的には中華帝国に押し込められた時に逃げ込むのが山城であるという、地元抵抗勢力の拠点という見方をしています。

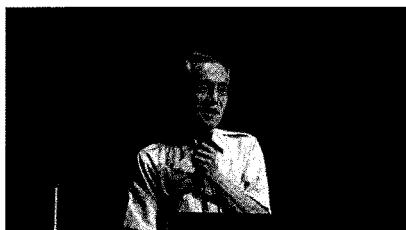


写真 12 出宮徳尚氏

これ（映像。以下同様の表記）が高句麗の第二番目の都と言われている中国吉林省の集安（国内城）の背後に
ある丸都山城の様子です。ここからずっと山を巡って城壁が築かれています。これが城壁の谷川に築かれている
水門です。本来ここに城門があるのだと思いますが、遺構がはつきりしません。ここに水門がきちんとあるのが
お判かり頂けるかと思います。このように深い谷間に築かれているということになります。これは篠簾型、つまり日本で言う簾篠の形をした谷間ということになります。ただ、この城壁自身が本当に高句麗時代のものである
かどうかというのは判りませんが、日本で言う重箱積みの石積みになっています。城壁の天場には、この様に通
称「女牆」と呼ぶ遮蔽装置（造作物）がきちんと造り上げられています。この様に、近世の日本の城郭で言えば
石垣の天場に設けてある土塀と同じ様な、防御に適した造り方になつてているというのが
お判り頂けるかと思います。それとは別に、これは国内城という王宮があつたところの
城壁です。これも同じように、いわゆる重箱積みで、石の積み方とすれば脆弱な工法と
いえます。中国の城には、敵方というのか、攻めて来る城外に向けて突出した、通称「馬
面」と呼ばれているものがあります。この馬面が、国内城では整備をされています。馬
面というのは本来、城壁に登つてくる敵兵を左右や背後から撃ち落とすという機能があ
るのですが、こここの場合はひとつだけなので、それがどの程度理解されて造られていた
かどうか判りませんが、こういう馬面を造っています。

最初の王都とされている桓仁のところ（中国遼寧省）にある五女山城ですが、これは

まさに屋嶋と非常によく似た地形の山です。この山城全域に城壁があるのでではなくて、要所に城壁を築いています。これは今日の中国の遼寧省の研究者による形態分類では、山頂型になります。日本では頂部鉢巻き型と一般的に言われている種類です。これも前に示した山城と同じ様な石垣を築いていますが、この遺構の現況では、女牆を設置するのは如何がなものかという疑問を持つています。これは屋嶋城などでも言えることですが、天場より少し山腹に下りたところに防御線を設けています。つまり平坦部の端ではなくて、少し山腹に下りたところへ設けるという共通性を持っています。これも鳳凰城という、丹東から瀋陽に抜ける谷間に位置する山城で、型式で言うと築断為城型になります。谷渡りのところに本来この様な石墨を築いていて、右の山と左の山の間の谷間に城壁を設けて山間に城を造っています。この様な形態が築断為城型という城の分類になります。

次に、吳姑山城ですが、そんなに高い山ではなく、緩やかな山地に築かれています。下のほうは遺構で、上のほうの石の新しくなっている箇所がみな修築をしている状態になります。ただ高句麗の山城の石垣の全般が、同じような重箱積みになっていますので、本当にこれが今問題にしている時期のものかどうかというのは、少し懷疑的な要素があります。

石台子山城は唐の高句麗制圧の時に落城していますが、馬面が定間隔できちんと造られています。この尺度から見ると五〇メートル間隔ぐらいでしようか。これは弩ではなくて、やはり弓での対応であろうと思います。弩の有効射程は一〇〇～二〇〇メートルと言われていますから、間隔が短いということは弩ではなくてまだ弓であるという見方をしています。これがその石台子山城の北門ですが、ここにきちんと馬面が設けてあります。構

築の様相が私には少し判らないのですが、重箱積みの上に乱石積みの石壁を設けています。これが当時のものか後のものかということを把握していませんが、門のここに門礎が設けてあります。焼けた門建物の木材が出土しています。日本の門に比べて、防衛に適するようく狭い門を造っています。

二、律令体制下の古代山城の倣效たる唐代前期の山城

次に、京口城です。今の南京の東方の鎮江というところにある城ですが、中国の南北朝時代の山城です。その土壘の城壁ラインは、もう開発が進んでいて、なかなかその形状を観察できないのが実態ですけれど、この時代になるとやはり中国の中心地にも、山城が出現してきます。

次に、石包城ですが、敦煌の南東六〇キロほどのところにある山城です。海拔は二〇〇〇メートルクラスの高地ですが、盆地内の丘の上に平らな城が築かれています。城門です。唐の時代は版築の城壁が多いのですが、この城は名前が石包城と呼ばれるだけあって、城壁が石積みで築かれています。おそらく良い粘土質の土が近隣で採取できなかつたのだと思います。この画像がポイントです。中国の城は平地の都城ですから、都城の周りには日本城郭の外堀にあたる付帯防護施設を巡らせていますが、この城も丘の上にありながら、護城河という堀を巡らせています。平地のどこの城壁のすぐ外にも、こういう山の上であってもきちんと堀を設けています。つまり城造りのマニュアル通りに造っているのです。たとえ山の上にあっても、城造りは城壁と堀とセットで造るということをきちんと行っています。

次に、敦煌から五〇キロぐらい東に行つたところにある鎮陽城ですが、この城は唐代初期の激戦地です。これが馬面ですが、馬面が等間隔でずっと並んでいます。この間隔の距離が、両方から弩でぱちようど射程の中に入るという配置になつています。さらに、日本で言う版築という造成土層がよく見えています。こういう本格的な土木構築の城壁造りを行つているが、中国の築城のあり方になります。

この遺構そのものは明清時代なので、類例とするのは如何がかとは思いますが、これは松藩古城という、有名な九寨溝の近くの城です。これは吐蕃とばつまり唐帝国がチベットの周辺民族との交渉の窓口になるというのか、交易の場所になるところに造つてある城で、今の城郭遺構は先程も言いましたように明清時代ですけれども、記録上では唐時代に出現した城になります。ですから、明清時代に唐の城跡を踏襲したのかどうかという問題はあります。南門から西門まで山上にずっと城壁を巡らせてあります。山側の城壁の外側に溝状の凹みが伴つていて、これは護城河の名残と判断できます。あるいは、唐の時代の遺構かも知れません。このように、山上であつてもいわゆるマニュアル通りの城造りをしています。

次に、洛陽の合璧宮ですが、岡山市と洛陽市は都市縁組をしており、考古学の交流を行つていますので、洛陽に行つた時に見て来ました。洛陽は本来（唐時代）が副都ですから山城の様なものがないのですが、洛陽の文物工作隊の方が山城に類似する遺跡を探して、連れて行つてくれました。両脇にあるのが門闕になります。こちらの手前の方が正門になり、奥に正殿があります。その奥に烽台のぶだい烽火台が設けてあります。この場所は、洛陽城から一七キロの距離にあり、これは唐の軍防令に規定する烽火台設置間隔の三〇里のキロ数に当たつてます。

で、洛陽では離宮としていますが、離宮というよりも多分に軍事施設、つまり烽火台を伴う山城の一種ではないかというのが私の個人的な評価です。ここが烽台にあたり、こちら側に三箇所の段築を築いています。ですから、正殿、前殿、それから門闕という、いわゆる役所的な建物のセット関係になっているというのが中国都城の近隣における山城の在り様になります。

三、西日本の古代山城

高句麗の山城というのは、基本的には自国よりも組織や兵力や兵器も進んでいた中華帝国の侵入に対しての退避型、つまり逃げ込みながら抵抗する場となります。この図は、鴨緑江おうりくこうより北側、今日の中国遼寧省と吉林省の山城の分布になります。もちろんこの他に渤海時代や後の金時代の山城もありますが、除外しています。ちなみに言いますと、この九九箇所の山城のうち、大型のものが一七箇所、中型が四〇箇所、小型が二五箇所という分類になります。つまり国家級のものが少なくて、地域社会の防衛拠点が多いということになります。日本の江戸時代の概念をここで持ち出すのがいいかどうか判りませんが、江戸時代の軍学者が戦国時代の城を評価するのに、城堅固の城、所堅固の城、国堅固の城という分類を行っています。その分類を当てはめると、やはり高句麗の山城は、地域社会を自分たちで守るというコンセプトで城堅固の城と所堅固の城が圧倒的に多くて、国家級の国堅固の城がごく限られた数になります。

ということは、制度的なフォーメイションはないにせよ、それぞれが中華帝国の侵入に対して兵力を分散展開

して迎撃戦を行い、結果として撃退するという戦略性がそこに秘められているという理解をしています。こういう山城の本質が、日本にどういう形で導入されたかということが本日私に与えられたひとつの課題です。今更私が申し上げることではありますんが、古代の山城は、神籠石系山城、これはもう呼び名をやめようという提唱も出てますけれど、学史的に意味がありますからそのまま使います。神籠石系山城、つまり記録に現れない山城と、それから朝鮮式山城、これは白村江の惨敗の後に急速設けた山城、また修築、廢城の史料（記録）の残っている城（山城？）もあります。

日本の山城は、記録上から見ていくと、少なくとも五期ぐらいの築城のファクターがあつたのではないかという見方をしています。そのうちの第三期のファクターに基づいて出てくるのが、いわゆる天智紀記載の山城といふことで、その前後に二期ずつぐらいの築城、あるいは城を整備する要因があったのではないかという見方をしています。ですから第一期、第二期に造られた城について、これは記録に残っていませんから、当然神籠石系の山城になります。

四、天智紀の山城（第三期）

古代山城の分布は、いわゆる歴史環境という様相から見ると、やはりそれぞれの地方地域の要点に伴つて造られていくということが言えます。これら山城の城壁のアップダウンの様相については、特に北九州の神籠石系山城を見ると、雷山を除くとほぼ同じパターンで城壁が巡らされていることが判ります。ということは、自然発生

的に出現したとか、朝鮮半島の見様見真似で築城されたのではなくて、築城者の意図をきちんと反映して造られているということになります。そうすると、日本の古代山城は何の目的かということになります。

これはもう私は三〇年前から提唱をしており、こここの数年ご理解が頂けるようになりましたが、嶮山城と緩山城の機能的大別觀を提唱しています。基本的には嶮山城は、中世の山城と同じように山岳の險しさを利用して用兵の俱としての効率を高める城で、一般的には難攻不落型になります。緩山城は、神籠石系山城の多くが造られていている里山の、集落背後の緩やかな山という意味合に由来させています。要するに嶮しい山城は専守防衛、つまり逃げ込み用、それに対して天然の嶮を欠く緩山城は生活空間との連携、つまり前進基地用となります。一般的な用語では、ディフェンスとオフェンスとの使い分けがされているのではないかと思っています。そういう観点で瀬戸内海沿岸地方の山城を見ると、朝鮮半島から博多へやつて来て、博多から瀬戸内海を通るという当時のシーレーンを防衛するというのか、シーレーンを確保するためにきちんと配置されているといえます。その多くは、一部には嶮山城に見込めるものもありますが、むしろ緩山城の進出用前進基地型、つまり中央政府、大和朝廷が大陸と交流するためのシーレーン沿いに設置していることになります。

それに対しても、天智紀の山城は逆を向いているのが、その城構えの在り方に見えて来ます。それと、九州の方々からなかなか的確な回答を頂いていないことがあります。たとえば吉備の国ですと、備前、備中、備後と分国されています。豊の國も豊前、豊後に分国されています。それから肥の国も肥前、肥後に分割されています。同じように筑紫国も筑前と筑後に分割されていますが、筑後の国がなぜ肥の国を分断しているかということについて、

私は疑問を持っています。有明湾沿岸であれば、本来は肥前と肥中と肥後になるはずですが、肥中となるべき地域がなぜか筑後となっています。ということは、どうも肥の国の分断が意図的に行われており、そこに軍事的なやはり制圧というのか、進出型の城をきちんと整備して地域社会の従来的な権益、伝統、為政を分断する軍事的な施策があつたのではないかという観点を持つています。

五、律令体制の整備と山城施策

本日の私の命題であります、鞠智城の築城目的と運用の経緯ですが、鞠智城がいつ築城されたのかが、やつぱり判然としているのが辛いところです。筑紫大宰府は、遠の朝廷みかどとありますが、この遠の朝廷が『日本書紀』の中に一度だけ中国式呼称の「筑紫都督府」と記されています。筑紫大宰府ではなくて、筑紫都督府となっています。百濟が滅ぼされた後に、百濟に置かれるのは熊津都督府くまづしんです。それで、ひょっとすると、北九州は唐に占領されたかそれに近い状態に置かれていたのではないかと、かつて関西の田辺昭三先生が言われた観点です。少なくとも博多一帯は、唐の將軍によつて占領された実績があるということから、「筑紫都督府」という言葉が『日本書紀』からあえて消せなかつたのではないかと思います。つまり、『日本書紀』を唐も見る状況、遣唐使が持参したのか、唐からやつて来た使節達が見たかのどうか判りわかりませんが、今で言う情報開示がされている文書ですから、唐が見聞きできる状況にあつたことになります。あえて「筑紫都督府」を「筑紫大宰府」と日本語に直すことができなかつたのだと思います。

ということは、やはり大宰府の性格を示していて、言うなれば、唐の占領の前衛基地になりうる重要な場所であるという要件を持つことになります。そうすると、有明湾の北部を抑え、その次に抑えるところはどこかというと、当然に鞠智城になります。肥後平野への出口、そういう戦略的要衝を筑紫大宰府の後方支援基地として抑えたという観点を導き出せます。

要は、何が言いたいかと言うと、鞠智城の一番高いところ、これは長者原ですが、当時の管理施設があったのではないかという場所です。それに対して平野側の南側の城壁（土壘）位置が如何に低いかということは、この管理施設が城外から丸見えになつてているということになります。というよりは城外へ見せて、視覚効果をもたらしていると評価できます。つまり、これは行政庁の役目を持たせて、非常に目立たせているということになります。これは中世の築城記などによると、城の中は見通せないようにするのが城郭の施設整備における戦術的な鉄則ですので、鞠智城がわざわざ管理施設を城外から見えるようにしているのは、純用兵面からいえば適正を欠くことになります。ということから、やはり戦争本意の城ではなくて、行政庁に重きを置いた城ではないかという仮説を持っています。このパターンは実は鞠智城がひとつの中作になつて、次に発展継承されて行くのが、多賀城となります。そういう前衛基地、軍政を敷く前衛基地としての機能、要は大和政権が周辺を軍事制圧という、軍政を敷くのに使われたとみられます。言葉を変えれば、中国の城造りをどうもデフォルメして導入したのではないかという見方をしています。

最後になりましたが、怡土城について話をします。

怡土城の前面は城壁が平地に下りてきています。これは神籠石系の山城を含めて他の山城の縄張り（占地形態）と異なっています。つまり城地が、平地を取り込んで背後の山との一体構成になっています。松藩古城とほぼ同じ造りになつていると見なせます。それともうひとつは、城壁の各拠点に、馬面ではありませんが中国では敵樓と呼んでいる、近世城郭の感覺で言えば隅櫓になる建物をきちんと整備しています。つまり城壁（土壘）だけで城地を囲んでいるのではなくて、城壁の上に防御する施設をちゃんと設けているのです。ですから怡土城は中国の唐式の城の造り方をしているということになります。特に今よく判つているのは、このポイント、ポイントにきちんと礎石建物が建てられているということで、まさに敵楼の設置を物語つており、この城壁（土壘）の上面にも設けていたと考えられます。こういうようにまさに中国式、唐式の築城を導入していると評価できます。

これは余談ですが、神籠石系山城と朝鮮式山城の並存するのが讃岐国です。六六三年の後に屋嶋城が築かれますので、それと同時に連携して従来の神籠石山城（城山）の、今でいう近代改装が行われたとの個人的な見解であります。この山城だけは古代山城の中でも本格的な複郭、内郭外郭を城壁でちゃんと区画する例外的な縄張りの山城ですが、複郭が改装の結果を反映していると見立てています。

今日の結論から言うとやはり、鞠智城は結果として、大宰府つまり筑紫都督府をセンターとして、両脇に配されている一方（南側）の軍事施設という見方が良いのではないかと思っています。造った時には確かに日本防衛であつても、その後の律令政府の体制になつて行くと、むしろ唐の施策を導入しながら、当時の時点において日本の近代化が図られる中で進められた軍政の場所であるという観点を持っています。

それともうひとつ、日本の都城になぜ城壁がないかとの裏返りではないかと、私は思います。^{ご存知}のように大宰府も城壁がありません。それから藤原京、奈良の都（平城京）も城壁がありません。平安京もありません。つまり、本来であれば負けて、唐が攻めてくるという緊急事態に王都防衛の軍事施設を造らなかつたと^{いうことに}、西日本の山城の本来の意味があるよう、私は個人的に考えています。つまり唐に対して正面切つて歯向うことをしない意思表示の裏返り（反対現象）で、ああいう城が残っているのではないかとの、これはあくまで主観的な観点ですが持っています。

おわりに

以上、高句麗の山城と鞠智城の古代山城のフォーメイションからの価値・評価は、筑紫都督府との関連性で歴史的には平安時代中頃までちゃんと軍政的な存在意義があつて、修築あるいは整備を施されて、運用されたのではないかとの問題提起をして、私の報告を終わらせて頂きます。
ご清聴どうもありがとうございました。